

昭和五十二年

佳き顔の里芋を頒く子の皿へ

初刷の極彩版は妻子占む

降る雪に弾み付ききし夕笹子

髪詰めて童顔もどる五月妻

病むわれに声撒きちらし梅雨鴉

虹立てり荒き雫は縦の直

郭公の峰三方よ信濃へ下車

蝦夷青嶺肩寄せて守る湖の艶

灯より濃き金魚を掬ふ夜宮かな

夜焚火となりて炎のいま丈余

転げ出て故山の匂ひ虚栗

昭和五十三年

春の地震白鷄百羽揺すりたる

雁引くや荒布色なる島の子ら

紅梅にもつとも近く女ごこゑ

大いなる春月母子寄る方に

昨夜雨の籠り蚊放つ木曾格子

ぼうたんの白に浸りてゐる浴後

切株の白打つて雨盆の山

あかあかと諸洗ひあげ終戦日

明神のうしろ日当る竹に蝉

温言のごとき日を載せ茶の咲けり

祖父の忌の雨たつぷりと葱畠

夕凍みの直路三十路の靴鳴らす

昭和五十四年

風邪に臥す一日梅の光りさま

実南天笑みのこぼるるばかりなり

白梅の薬ぱつちりと雨後の山

どつと灯の点る親しさ田植あと

鳥渡る空傾けて棒倒し

野に出でてよりの水勢まんじゆさげ

遊行忌の道一本や相模晴

当てなき歩柿の家より楽溢れ

昭和五十五年

朴落葉山の暦日重ねけり

枯月夜燭入りて堂膨らむよ

口笛に空鮮しや桐の花

ジャワ 四句

朝市の涼一とくるみバナナの葉

波のりのこゑスコールのあがる海

アイシャドウ濃く炎天の一帆追ふ

海上につよき一星メロン冷ゆ

炎ゆる日のはじめのトマトもぎにけり

毛虫焼く一部始終を見て足れり

石獣のひたすら座せる大暑とも

草稿に手を置くことも夜の秋

石落の花誰も来ぬ日と決めてゐし



空ら拭きの机にひびくしぐれかな

山中の雲にあけびをあづけたる

棒のごとき白息何もかもこばむ

水仙の初花一本目の香氣

昭和五十六年

頂へ道の集まる初詣

紅梅の上白梅をわたりし風

紅梅の中へ一步の夕ごころ

青き踏む一遍遊行の地なりけり

かたまつて仏の裾のふきのたう

夕霏光琳笹を鳴らし過ぐ

栗切りのぼる太陽金盞花

霞立つふるさとに入る遠忌かな

焼山に月の出かかる母郷かな

よく聴ゆ汽笛西瓜は一番花

白日傘水母の海を覚ましゆく

散りそめて白さるすべり水の上

タイ、インドネシア八句

白服にねむり成層圏を航く

羽抜鶏もんどりうつてスコール来

ひとねむり椰子の高みのハンモック

昼寢覚椰子五六本突立てり

碧きまま昏れて流星椰子の上

長政のこゑぞ全天夕焼けて

夕焼空アララ讃ふるこゑのぼる

シャワー浴び貝殻ランタン灯の入りし

柿ことごとく落ち裏山の青天井

方丈に鯉の一ト跳ね秋天下

木の実拾ひみほとけの掌に眠らする

吹き寄せられてゆく東京の空つ風に

水仙の香のつきぬけてゐる夜空

長湯の子柚子もろともに掬はんか

大年のむらさきだちし夕櫂

昭和五十七年

箸置に箸鷺の幼なごゑ

ぶつかり合ひふとる仔豚や桃ひらく

日の牡丹日暮れて風の牡丹かな

竹が散るまた散る諭されゐるごとし

そら豆のもう咲いてゐる青入江

さやゑんどうの摘みどき海の乱反射

水馬二つ光輪ぶつけ合ひ

予後よきを聞きし日よりの鉄風鈴

友の忌の白あぢさゐを胸の丈

はやばやと入りて菖蒲湯匂はすか

のうぜんの方へ顔向け母眠る

祭果て巨き夕浪立ちにけり

影ぐるみ灼かれ突立つ義民の碑



立秋の影のごと出て帆の一つ

子と食うぶ柿のあかさの他は欲らず

猛り鴟丹を強くせる宮柱

水仙の葉の尖りくる怒濤音

紙角力とんとん年の詰るかな

もてなしに大き湯婆年の宿

みそさざい白に囲まれ白を剝る

昭和五十八年

寒牡丹こゑあたたかく讚へらる

望遠レンズ花菜畑の黄を絞る

告別の膝折る寒の百合の前

八方塞の一方展けチューリップ

他所者のほえられみたり桃の村

匂ひ立つ芽木突風の過ぎし闇

倒れたるまゝの一杖彼岸講

団欒の灯のゆきわたりさくらんぼ

よく食べる子にはさくらんぼが出るぞ

デザートに枇杷の出で夜を本降りに

祭くる門川に殖ゆ糸みみず

鬼灯を雨に打たせて船世帯

武者窓を烏揚羽のよぎりけり

月明の紙魚と遊びて師の忌くる

帰省せり蠅取りボン吊る家に

どぜういんげんこまめに摘んで生身魂

末つ子の水撒き上手水打てり

ふるさとの雲の匂ひのかんぴよう着く

かまつかに出陣の下知下るごとし

十五夜の空へこぞれる糸瓜加持

形ばかり長けし子に似てコスモスは

海桐の実弾けむばかり漁日和

古梅園他六句

採煙蔵鶴の眼のごと凍てて火は

膠釜あたたかく年送るかな

大仏に見下されゐて風邪貰ふ

うすらひをつつと鶉浄瑠璃寺

橘寺垣を低めに手毬唄

白菜をどかと仏へ飛鳥人

掃き了へて夕凍みねずみもちの実に

売れのこる芒みみづく風邪引くな

裸木となりてさくらはそこらの木

藪つばき他所者を見る目付して

昭和五十九年

実ざくろの木乃伊めく枯れ祖父の忌よ

通り矢の鼻先昏れて寒鴉

遠浅の海に遊べること朝寝

春泥をぬぐひて詣づばたもち寺

さへずりに十余り甘茶茶碗伏せ



さくら薬降る制服の紺の肩

蔦若芽爬虫類館蔽ひけり

目立ちたがる芍薬赤芽雨催ひ

父

一言で癌と告げられ躑躅燃ゆ

つばくらめこゑの徹れる看護婦来て

花椎か薬師の壺か夜を匂ふ

恐竜展

夏痩せてブラキオサウルス仰ぎけり

絵解僧こゑをおとしぬ遠蜩

弁慶の泣きどころにて蚊の打たる

法難絵凶風死す灘を正面に

焼香の列遅々としてのうぜん花

ぶんぶんと泣虫投げ出さんかな

賞与の日そら豆が出て湯も沸いて

コップに挿すすずめのでつぱう独立祭

父試歩より吹かれて戻る鴨足草

幅跳の助走路に沿ひ雁来紅

いち早く自然薯黄葉狐雨

回遊の鯉の鰭見え一遍忌

鬼女祀る堂出て日暮とりかぶと

朶を焼くうしろ鬼無里の真暗闇

清里聖アンデレ教会

霜旦のイエスに通す緋毛氈

ブロッコリ茄でて数へ日籠らふか

リア王読むポインセチアを足許に